論文の内容の要旨

論文題目　『明六雑誌』の政治思想―阪谷素と「租税公共の政」―

氏名　河野有理

博士論文要旨　『明六雑誌』の政治思想―阪谷素と「租税公共の政」

序論では、先行研究を批判的に検討し、本稿の問題関心を示した。

『明六雑誌』と「明六社」とは異なる。また『明六雑誌』も「明六社」もそれぞれの内部構成は多様である。『明六雑誌』の性格を、「啓蒙」「国体」（ナショナリズム）「文明」といった観点から分析してきた先行諸研究はこの点に十分意識的ではなかった。また、僅かに三編しか掲載していない福澤諭吉を、『明六雑誌』を「代表」する論者であるかのように記述する研究傾向も同様に疑問であった。代わりに『明六雑誌』上で活発に執筆した阪谷素を中心に『明六雑誌』の政治思想を叙述する可能性を提示した。

第一章では、『明六雑誌』寄稿者達の「文明」観を「開化」との比較において検討した。

「文明」を考える際に問題になったのは、第一に「文字」であり、第二に性であり、第三に市場であった。彼らのほとんどに共通していたのは、これらのそれぞれにあるべき秩序が存在するという確信と、そのあるべき秩序を実現することが統治機構の任務の一部であるという考え方であった。

他方で、彼らに共通の危機感は、「開化」は「欲」の野放図な増大をもたらすということであった。それが端的に現れるのが、市場と性という領域であった。あるべき秩序（「文明」）

を実現するために、「欲」をどのようにコントロールするのか、彼らに共通のこの思想課題は、統治機構は「信」をどのように調達するべきなのかという問として語られた。その際に、出された解答の一つは宗教（「教法」「教門」）であり、もう一つは政治（「政教」）であった。この問の前に立ち、明確に後者を選択したのが阪谷素であった。政治によって「信」を調達するには、ではどうするべきなのか。阪谷は、議会において「租税公共の政」を行うことを主張する。「租税」の徴収と配分について、「合議」を通して一つの結論に至るその過程で、個々人の「欲」は、政治共同体を導く集合的な「精神」へと転換する。そのように阪谷は主張した。

阪谷は、人間における「欲」の存在を必要不可欠なものとして承認しつつ、むしろそうであるがゆえに「欲」が私的なものに堕していくことに意識的であろうとした。人間の欲望が公的なものに昇華していく契機として政治を位置づける阪谷にとって、政治とは道徳的な教育の場でもあったのは当然である。

第二章では、阪谷の「租税公共の政」の構想を、同時代の議会構想と比較検討した。

まず、議会構想を検討するに先立って、議会に先行する政治体制（「封建」「郡県」）の選択の問題が、当時の為政者・知識人にとって大きな問題であったことを示した。「封建」「郡県」そのどちらにあっても、「議会」は、望ましい統合を実現する手段として焦点化していた。だが、「議会」に期待される機能は、それぞれ異なっていた。「封建」体制を前提にすれば、「議会」は、「封建に郡県の意を遇する」ものとして、「郡県」体制を前提にすれば、それは「郡県に封建の意を遇する」ものとしての機能が期待されていたのである。「郡県」実現後の明治七年に提出された「民選議院設立建白書」は後者の例として位置づけられるべきものであった。板垣等の民選議院構想は、以上の前提から見れば、「封建」論の系譜を引く議会構想であった。

「分権」、「士族」の「気力」論を提示し、情緒的な一体化を目指す板垣等の議会構想に対し、他方、『明六雑誌』の津田真道や神田孝平は、「智識」と「会計」「監察」制度を念頭に置いた「郡県」の議会構想を提示した。阪谷の議会構想は、「租税」制度に着目するという点で津田や神田と問題意識を共有していた。だが、阪谷の議会構想には「監察」という発想は見えない。他方、議会を統治機構の抑制よりは、むしろ統治機構との一体感を創出する制度として捉える点で、板垣等の議会構想と共通する点があった。だが、板垣等が「士族」の「気力」にこだわったのに対し、阪谷は金銭に対する人間の欲望に取り分け着目した点で両者は異なっていた。板垣にとって「気力」は与件であったのに対し、阪谷にあって、「気力」は「欲」が「公」的なものへと昇華される過程で得られる成果だったのである。

第三章では、阪谷の思想史的人生を概観した。

青年時代の阪谷を特徴付けているのは「烟霞癖」であった。阪谷は、青年期に各地を旅行し、旅先の景観を漢文で表現し、「見立て」ることで様々な風景を発見していた。儒学的

教養の浸透によって、次第に盛んになっていった風景享受の作法と実践とを阪谷もまた反復していたのであった。以上のような阪谷の「烟霞癖」はまた、一種のピクチャレスクな心情の発露でもあった。「奇」なるものへの愛着として現れるそうした心情は、同時代的には、「攘夷」の志士にも、「蘭学」書生にも連なる精神態度であった。

だが、母の死とそれに伴う「喪」の作業によって、阪谷は「奇」なるものを否定し、「天」の「道理」へと回帰していく。それまでの放浪癖が嘘のように、その後の彼は生地備中にとどまり、朱子学の基本的なモットー群である「白鹿洞掲示」の「日誦」を通して「道理」の実現を希求するようになった。

阪谷にあっては、世界の基本的な構成要素は「理」と「気」であった。同時代に急速にその存在感を増しつつあった西洋の学問は、しばしばそれが「窮理」の学と呼ばれるにもかかわらず、阪谷にとってはあくまでも「窮気」の学にすぎなかった。「理」は「掲示」の教に尽きている。他方、西洋における「人心」の統合は、「耶蘇教」なる「教」がそれを担保している。彼らの富強の秘密は、「教」による「人心」の統合にある。阪谷はそのように考えた。だが無論、死への不安や来世の安楽という「利」によって「人心」の統合を図る「耶蘇教」は、基本的に誤りである。「利」ではなく、「理」（それは「掲示」に具現されている）によって「人心」を統合すること。これが阪谷の政治学の基本的な構想であった。

そのための道具立ての一つが「会議」であった。だが、「会議」は、阪谷にとって統合を達成する手段であるばかりではなく、それ自体が教育的な場でもあった。個々人が「私見」を去り、「合議討論」の中で、真の「公論」を発見していく。その時、政治共同体にとって、最善の決定がなされているばかりでなく、各人もまたそれ以前よりも善き人になっているであろう。「革命」の根本的な原因を「政教分離」に求める阪谷にとって、「会議」の政治学は「政教一致」の政治構想でもあったのである。

以上のような「掲示」の具体化としての「会議」の政治構想は、しかし、明治政府の「天照大神」を以てする「政教一致」政策と微妙な関係に立つことになった。「掲示」が背景として持つ儒学という「外来」の「教」が、「天照大御神」等の「天祖」と果たしていかなる関係に立つのか、この点をめぐり阪谷の議論はしばしば錯綜した。

この錯綜を解消に導いたのが、明治七年の民選議院設立建白と『明六雑誌』の衝撃であった。『明六雑誌』や、設立建白に刺激して提出された建白書において、阪谷は、依然として人間にとっての「欲」の問題に焦点を当てている。だが、そこでの「欲」は、もはやあの世の不安や希望ではなく、専らこの世にかかわるものであった（「財貨」「女色」）。さらに、「会議」は、単に「欲」とは切り離された抽象的な「理」の発見でなくして、「財貨」という人間の「欲」に最も密接した現象について、その具体的なあるべきあり方をめぐる「合議」と規定されるに至った。これを「西洋」イメージの転換として捉えれば、来世の「利欲」を満足させる「耶蘇教」を中心に統合されているという従来のイメージは、専ら今世における「利欲」を「合議」することによって統合されているというイメージへと転換したのである。前者が静態的であるとすれば、後者は動態的であった。この世の「利欲」

は、「合議」によって政治共同体を「文明」に向かわせるための集合的なエネルギーへと変換される。前者においては十分に説明できなかった「西洋」の富強の秘密を阪谷はついに発見したのである。

終章では、阪谷と『明六雑誌』寄稿者たちが、いわば「統治の倫理」を語ろうとした点において共通しているという見通しを提示した。

以上、『明六雑誌』寄稿者たちの政治思想は、その結論においてよりも、むしろ彼らが解答を試みた問において共通することが示された。即ち、統治機構は、いかにして人々を教え導き、またその過程において、いかにして信頼を調達するべきなのか、という問題である。あるべき統治が道徳的教化を伴っていること、及び、そのコロラリーとしての民の（非道徳性ではなく）無道徳性は、共に彼らの政治思想の与件であった。逆に、＜革命＞を生き抜いた彼らにとって、統治機構の信頼性は、課題ではあっても、自明の前提ではなかった。

福沢諭吉がそこから最も遠い存在であるところの、以上の共通点は、阪谷において最も典型的に（思索の結果、所与のものとしていた伝統的統治観が一部変容したことをも含めて）現れている。これが、本稿の結論である。